

トニー・バーチの文学¹⁾

佐 藤 渉

オーストラリアの作家トニー・バーチ (Tony Birch) は、その著作がオーストラリア国内で高く評価されているだけでなく、近年は気候変動をめぐる諸課題について人文学の立場から積極的に提言を行っており、しばしば国内外の会議にパネリストとして招かれている。2019年4月にバーチ氏を日本に招聘し、植民地主義や気候変動と創作のかかわりをテーマとした研究会および公開講演会を開催した。本稿ではバーチ氏の経歴と作品を簡単に紹介した後、来日に合わせて実施したインタビューを掲載し、日本ではほとんど知られていないバーチ氏の創作を紹介する。

バーチ氏は歴史研究者と作家という二つの顔を持つ。研究者としてはメルボルン大学で長年にわたり教鞭をとり、現在はヴィクトリア大学の先住民研究ユニット *Moondani Balluk* で上級研究員を務めている。メルボルン大学時代から現在にいたるまで文芸創作の指導も行っている。作家としてはオーストラリアの主要文芸誌にコンスタントに短編を発表しており、年間の優秀短編をまとめたアンソロジー *Best Australian Stories* シリーズの常連でもある。近年は長編小説の執筆にも取り組んでおり、2011年出版の *Blood* を皮切りにこれまで3作の小説を発表している。*Blood* はオーストラリア最高峰の文学賞であるマイルズ・フランクリン賞の最終候補となり、第2作の *Ghost River* (2015) ではヴィクトリア州首相文学賞 (先住民文学) を受賞している。また、長年にわたるオーストラリア文学への貢献が認められ、2017年にはパトリック・ホワイ特賞を受賞している。このように、バーチ氏の文学はオーストラリア国内では批評家のあいだで高く評価され、一般読者にも人気が高いが、国外ではまだ十分に認知されているとは言い難い。

バーチ氏は活動家としても知られており、先住民の権利や植民地主義の影響についてラジオ放送のインタビューや講演会、あるいは文学祭などを通じて積極的に発信し、エッセイも多数発表している。また、近年は気候変動を主要な研究テーマとし、気候変動がアボリジナル・コミュニティに及ぼす影響を論じたり、アボリジナルの人びとの土地や環境にかんする知識を政策に活かすよう提言したりもしている。

ここでバーチ文学の背景を知るために、氏の生い立ちにも軽く触れておきたい。バーチ氏はオーストラリア先住民アボリジナル、西インド、アイルランドにルーツを持つ。1957年に生まれ、当時は労働者が住む地区だったメルボルンのフィッツロイで育った。高校を二度も放校となり、消防士として10年間働いたのちメルボルン大学で歴史と文学を専攻する。彼の少年期から青年期にかけての体験は自伝的短編集 *Shadow Boxing* (2006) に色濃く反映されている。バーチ作品の魅力となっている、登場人物たちの粗削りで生き生きした言葉遣いにはこうした生い立ちが深くかかわっている。

バーチ氏は市井の人びとを主人公とし、日常にふと訪れるおもいがけない瞬間やかけがえのない存在の喪失などを描く。劇的な出来事はあまり起こらず、バーチ氏の敬愛する是枝裕和監督の作品のように日常における人間関係を丁寧に描くことを得意としている。無駄のない文体で社会や人間

関係の一側面を切り取るバーチ氏の手法は、一見するとオーストラリア文学の伝統である社会リアリズムを継承しているように見えるかもしれない。しかし、彼の作品は表面的なスケッチにはとどまらず、多面的で謎に満ちた人間存在への深い洞察と共感に貫かれている。また、彼の作品を丁寧にたどっていくと、現代における植民地主義の名残がかすかな痕跡として書き込まれていることがある。バーチ氏の最新長編 *The White Girl* (2019) は、アボリジナルにかんする主題をあまり前景化してこなかった従来の作品群とは異なり、「盗まれた世代」として知られる混血のアボリジナルの子どもたちを対象とした隔離・同化政策に正面から取り組んだ作品である。²⁾ 同書は混血の孫娘を権力から守ろうとするアボリジナル女性の強さと愛情を描いた感動作であるが、本人もインタビューで語っているように、西洋国家によるオーストラリアの植民というプロジェクトは失敗だったのではないかという歴史家としてのバーチ氏の問題意識が刻み込まれているのである。

インタビューではバーチ氏の創作プロセスや、歴史研究者としての問題意識と創作の関係などについて語ってもらった。気さくで誠実な人柄のバーチ氏は、筆者の稚拙極まりない質問にも丁寧に答えてくれた。バーチ文学の理解にわずかなりとも寄与することを願いつつ、インタビューをここに掲載する。

《ストレートな質問から始めます。バーチさんはなぜ書くのでしょうか。》

あるアイデアにひかれて、それがいつまでも自分の中にとどまっていることがありますよね。そんな時、私にとってそのアイデアを理解してさらに発展させる唯一の方法が書くことなのです。たとえば今こうして日本に滞在しているあいだにも、私はたくさんのことを考えています。私はいつもノートを持ち歩いてメモを取ることにしているのですが、そうして書き留めておいたアイデアがある時フィクションに発展したり、ときにはエッセイの一部になったり、詩になったりするのです。そうですね、私は世界を理解するために書くのです。

《短編を執筆する時にはまずキャラクターの造形から始めるのでしょうか。それともエピソードが先でしょうか。》

私の場合、いつもエピソードが先に来ますね。たいてい小さくて取るに足らないエピソードが発点になります。たとえば短編集 *Common People* の中に薬物中毒の二人組の男たちが登場する“Party Lights”という作品がありますが、あの短編が生まれたきっかけは、テキサスのヒューストン空港で出会ったある男との会話なのです。どこから来たんだいとその男が話しかけてきたので、こっちもどんな仕事をしているのか尋ねてみたんです。そうしたら家を崩して地面に埋める仕事をしているという答えが返ってきました。

《あれは本当の話だったのですね。》

ええ、あの部分は。残りはフィクションですけどね。短編では二人組が、重機を使って地面に掘った穴に家を埋める作業を目撃するのですが、男たちはドラッグの影響で朦朧としているから読者にはそれが現実のできごとなのか、あるいは幻覚なのか判らない。こうして空港での立ち話からあの短編が生まれたのです。

《面白いですね。ところで当たり前のことですが、作家は創作の媒体として言葉を使わざるを得ませ

ん。しかし、言葉はいつも対象とのあいだに距離を生みます。バーチさんは文体にかんして意識していることはありますか。》

私はフィクションを書くようになる前は詩をたくさん書いていました。陳腐な言い方かもしれませんが、私は「より少ないことはより豊かである」と信じています。そう、あるセンテンスとかフレーズとか描写があるとします。そこに書かれているわずか5つか6つの単語が、そのページには書かれていないすべてを表現していなければならないのです。ミニマリズムの逆説は、最小限の言葉が読者から引き出す反応はかならずしも小さいわけではないということです。わずかな言葉が読者の分厚い反応を引き出すことだってあるのです。私はシンプルで直截な表現を好みますが、だからといってシンプルな反応を期待しているわけではありません。私の作品が好きな読者は、読む過程で彼または彼女自身が積極的な役割を果たしているのだと思います。それから、私は会話が好きですね。ヴァナキュラーな会話です。³⁾ 私の作品の登場人物はたいてい洗練されていない人たちですが、彼らのヴァナキュラーな表現は時に詩的でもあります。それに場所あるいは風景も私の作品では重要なキャラクターです。ある場所を描写するときには印象派のような手法を使うよう意識しています。それは読者にその場所を想像して欲しいからです。映画『ピアノ・レッスン』で作曲を担当した音楽家のマイケル・ナイマンを知っていますか？ 彼のピアノはとても軽くてミニマリスト的です。私の言葉の使い方も同じです。両手で演奏するのではなく、片手で演奏すると言えはいかな。

《バーチさんの作品の根底には寛容さがあると感じます。たとえばアボリジナルの人びとが経験してきた暴力を描く時にも、決して対立をあおるような書き方はしていません。》

暴力を描くときには十分に用心せねばなりません。時には暴力を直截な表現で描くこともあります。たとえば、短編集 *The Promise* 所収の“Frank Slim”という作品では主人公のヴァイオラがフランク・スリム〔東欧からの移民という設定〕という殺し屋に依頼して自分を辱めた男に制裁を加えますが、フランクが男を痛めつける場面はあえて率直に描いています。一方でヴァイオラが男に辱められる場面は仄めかしにとどめています。なぜなら、その男に勝利の栄光を与えたくなかったからです。

アボリジナルの人たちは酷い暴力を経験してきましたが、*The White Girl* では彼らの歴史や経験を明示的には語っていません。まったくね。その理由は、のぞき趣味に陥るのを避けたかったこと、そして読者に、とりわけアボリジナルではない読者にアボリジナルの人たちが経験してきた虐待を直に提示するのを避けたかったからです。この作品を読んでいただければ分かりますが、私がアボリジナル女性を描く時には彼女たちを単に犠牲者として描くのではなく、むしろ彼女たちの強さを描きたいと願っています。主人公のオデット・ブラウンがそうであるように。

《たしかにそうですね。この作品はアボリジナル女性の尊厳についての物語ですね。》

はい。私は読者に、アボリジナルの女性たちを憐れむのではなく、賞賛して欲しいと願っています。彼女たちの強さを理解して欲しいのです。

ところで *The White Girl* に登場する警官のビル・シェイには共感できるところもありますが、彼は本質的に哀れな存在です。彼が昔を思い出して、子ども時代はいつもブラックフェラ⁴⁾の後を歩いて歩いていた、と口にする場面がありますが、白人でありながら彼には居場所がなかったのです。

彼は当時のオーストラリア〔1960年代〕のある地域、とりわけ僻地の状況を体現しています。白人たちは *The White Girl* の舞台となっている町の支配権を握っていましたが、彼らには居場所がなかったのです。なにせ町自体が死にかけていたのですから。オーストラリア南西部の穀倉地帯つまりクイーンズランド州とニューサウスウェールズ州を南下し、ヴィクトリア州を抜けて南オーストラリアに至る地域—を外れて北部準州と南オーストラリア州の境界に近づいていくと、そのあたり一帯はもう砂漠なのです。人々はそのような地域にも農場を拓き定住しようとしたましたが、そうした試みはみな失敗に終わりました。この小説の舞台はそんな未来のない町の典型なのです。アボリジナルの人びとではなく、白人たちにとって未来がなかったのです。

《先ほど名前のあがった「フランク・スリム」という短編では、殺し屋のフランク・スリムという人物は結末近くになってようやく登場します。それなのになぜ「フランク・スリム」というタイトルをつけたのでしょうか。他にもバーチさんの作品には印象に残る名前がよく登場しますね。》

作家にはそれぞれ独自のこだわりがあるものですが、私の場合は人名に強いこだわりがあって、作品を書き始める前に登場人物全員の名前を—それからタイトルも—あらかじめ決めておくのです。ある時、かつて金の採掘で栄えたカナダの辺境の町を舞台にしたドキュメンタリー番組を観ていたら、取材に応じていた老女が「ああ、フランク・スリムがああ辺りに住んでいたわね」と言ったのです。その名前が気に入ったので、いつか使おうと思って書き留めておいたのです。いざキャラクターを造形していくと、不気味な雰囲気を出すフランクは—彼は一言も発しないのです—、ウェスタン映画の神話的なキャラクターを思わせる人物になりました。オーストラリア放送協会のインタビューを受けた時、聞き手が魅せられたようにフランク・スリム、フランク・スリムとつぶやいていましたが、この名前にはどこか詩的な響きがあるのかもしれない。

《バーチさんの作品の結末はオープン・エンディングが多く、読者は作品を読み終えた後もこの先いったい何が起こるのだろうと考え続けることになります。》

分かりやすい例を示しましょう。*The Promise* 所収の“The Ghost of Hank Williams”という作品の結末で、主人公は娘に会いに行くために電車に乗ろうとしています。⁵⁾ 彼は駅に向かう途中で公園のベンチに腰をおろします。手には切符を握りしめて。この終わり方は私にとっては完璧なエンディングです。私は読者を混乱させたりがっかりさせたりしたくないのです。彼は電車に乗るのか。彼にはそれだけの勇気があるのか。そして彼がその決心を下すことの意味を、私は読者に考えて欲しいのです。彼の行動を書きこむよりむしろ書きこまない方が、読者に対してもこの人物に対してはるかに敬意を払うことになります。彼がその後どうするのか、それは私自身にも分かりません。

《まさに読者が想像できる余地が十分にあることが、私がバーチさんの作品に惹かれる理由のひとつです。バーチさんは歴史研究者ですが、歴史研究者としての関心をさらに掘り下げたり、新しい切り口から検討するのにフィクションは役立っていますか。》

もちろんです。フィクションの方がすぐれていると主張するつもりは毛頭ありませんが。*The White Girl* が良い例です。あの作品にはドローレスという〔アボリジナル〕女性が登場します。彼女は〔福祉局に混血の〕赤ん坊を奪われるのを防ぐため、スーツケースに赤ん坊を隠してバスに乗ろうとしますが、もう少しというところでスーツケースが開き、赤ん坊が歩道の上に転がり出てし

まいます。その時、彼女はヒステリックな笑い声をあげます。ドローレスは子を奪われたアボリジナルのくちびろが経験した底知れぬ悲劇を体現しています。[ドローレスの娘で成人した] ワンダは母親の愛情を強く求めており、偶然出会ったオデットに母のイメージを重ね合わせて、抱きしめてもいいかと尋ねます。フィクションは読者から感情的反応を引き出したい場面で必要なストーリーを提示することができます。あるインタビュアーがこの作品を読んで三度涙を流したと語っていましたが、私にはそれがどの場面だったのか当てることができました。私は読者がこの本に深く感情移入するだろうと予想していましたし、そうあるべきだと思います。オーストラリアの歴史家は客観的・中立的ではないという評価を下されるのを非常に恐れていますが、私はむしろ政治的な立場を明らかにする歴史家でありたいと思っています。私には主題そのものが重要なのです。

《オーストラリアのように植民地化の歴史をめぐる論争が繰り返されている国では、歴史家が身を守ろうとするのも分かる気がします。》

もちろん。アボリジナルの歴史家の場合、[白人の歴史家が身を守るように] 身を守るのは難しいので精神的に疲弊してしまいます。

広島原爆についての本を読みましたが、もっとも強く感情に訴えかけてくるのは子どもたちの証言でした。日常の文脈の中で人々がどのような体験をしたのかを理解する方が、中立的な記述よりも効果的だと思います。

《次に「歴史戦争」⁶⁾についてうかがいます。オーストラリアでは90年代から2000年代にかけて、オーストラリアの過去の解釈と描き方をめぐって対立的な論争が繰り返されました。また「歴史戦争」には歴史家だけではなく、作家も巻き込まれることになりました。バーチさんは「歴史戦争」についてどのようにお考えですか。》

あれはとても残念な時期でした。お互いに敬意を表し、もっと知的で有意義な議論もできたはずなのに。キース・ウィンドシャトル (Keith Windschuttle) のような保守的な歴史家は真実には興味を持っていませんでした。彼らが仕掛けていたのは政治的・文化的戦争でした。当時の歴史の専門家たちは歴史研究という学問分野を守ることに汲々としていました。ある文学研究者は彼らのことを「90年代の貴族たち」と呼んでいるくらいです。あれは知的な論争などではなく、ドブの中で繰り返された政治的で下劣な争いでした。

《この論争では歴史研究の領域がフィクションに侵食されかねないという懸念が一部の歴史学者によって表明されましたね。》

インガ・クレンディネン (Inga Clendinnen)⁷⁾ のように歴史研究者がフィクションへの懸念を示すようになったのは、彼らが自分たちの地位に自信が持てなかったからだと思います。The White Girlがああ論争に巻き込まれるのはご免です。この本とああ論争の関係について質問されたら分かりませんとだけ答えます。分かっているのですが話すつもりはありません。

《今度は気候変動についてうかがいます。気候変動にかんする議論においてフィクションは何らかの役割を果たしうると考えますか。》

気候変動についてどのように意見を交わしていくべきか議論されていますが、気候変動を論じる

方法はひとつではなく、たくさんあると思います。どのような人たちとかわかっていくかによって、科学者、人文学者、作家、画家、映画監督などがそれぞれに果たしうる役割があると思います。気候変動とは直接のつながりはありませんが、私は来日する前に福島を描いた映画を観ました。あの壊滅的な事故は世界中に衝撃を与えたグローバルな出来事でしたが、あのすばらしい映画が伝えているのは一人の男性が妻を失ったという事実でした。もし私たちがこの星を大切にしなければ、かけがえのない人との日常的な絆が奪われてしまうことを私たちは理解せねばなりません。この映画の例と同じようにフィクションも大切なことを伝えることができると思います。

私が疑問に感じるのは、作家はみな気候変動をテーマとしたフィクションを書くべきだという人たちがいることです。フィクションを単なる機械的な装置だとみなすような考えは馬鹿げています。気候変動をテーマとしたフィクションを書こうと思って書き始めるのではなく、まずはアイデアの方から自然に浮かんでこなければいけない。クライ・ファイ⁸⁾というジャンルでは、オーストラリアでもジェイムズ・ブラッドレイ (James Bradley) やその他の作家たちが重要な作品を発表しています。しかし、だからといって誰もがクライ・ファイを書けるわけではありません。人間の条件について考えさせる作品は、気候を論じようが論じまいがそんなことにかかわりなく何が重要なのかを教えてください。実際、読書は私の世界観に大きな影響を与えています。

作家にとっての課題のひとつは、気候変動問題にかんして人びととつながる方法を見つけることであり、その点では人文学全体が重要な役割を担っています。科学者は説明したりメッセージを発したりするのが苦手だとよく口にしますが、彼らは人文学者や芸術家と協力して課題に取り組んでいくことを望んでいます。私たちにはそれぞれに異なる役割があります。あなたも気候変動について語るべきですよ。

《気候変動をめぐる議論における先住民の役割について論じたバーチさんの論文で、「衡平な対話」(equitable dialogue) という言葉がキーワードとして使われています。この言葉について少し説明していただけますでしょうか。》

この言葉はもともとデボラ・バード・ローズ (Deborah Bird Rose)⁹⁾ が使用した言葉です。「衡平な対話」とはお互いを十分に尊重し、その対話に価値と信頼性を与えることです。さらに言えば、「衡平な対話」とは継続的な対話であり、いったん関係を始めたら全力を尽くし、途中で投げ出したりしないことを意味します。たとえば先住民と先住民ではない人が気候変動にかんする対話を始めたら、その対話に終わりはない。終着点を設けることはできないのです。

《お互いに尊重しあうためには相手にたいして自分をひらいていかなければなりません。しかし、多くの人はそれを恐れているように思えるのですが。》

デボラ・バード・ローズは、異議申し立てにたいしてはオープンでなければならず、居心地の悪い状況に身を置くことを恐れず、その状況を乗り越えていかなければならないと述べています。この領域で私がもっとも尊敬する非先住民研究者はデボラ・バード・ローズとスティーブン・ミュイキ (Stephen Muecke)¹⁰⁾ です。二人とも 30 年以上にわたって先住民コミュニティと協働してきました。二人がリサーチを始めた頃は対話にも大きな困難が伴ったでしょうが、今ではそれぞれがフィールドとしているコミュニティで非常に大切にされ、家族のように受け入れられています。コロニアル状況にあった社会では信頼を築くのはとても難しいのですが、二人は先住民コミュニティとの信頼

関係の構築によろこんで全力を注いできたのです。

広島を訪問した時、広島の人びとが原爆によって街が破壊された経験を非常にオープンに訪問者と分かち合っていることを知り、私は謙虚な気持ちになりました。私を受け入れてくれていると感じました。平和記念資料館では私がこの施設を見学しに来たことを人々が心からよろこんでくれているのを感じました。オーストラリアをはじめアメリカやイギリスなどの指導者はとても内向きになっており、自国民をそれとは反対の方向に導いています。そうした政治はもう終わりを迎えようとしていると私は思います。

《私もそう願います。ここで読者としてのバーチさんについてもうかがってみたいと思います。バーチさんの好きな作家を教えてくださいませんか。》

好きな小説家はノルウェーの作家パール・ペッテルソン (Per Petterson) です。『馬を盗みに』を書いた作家です。短編小説ではルシア・ベルリン (Lucia Berlin)¹¹⁾ です。彼女の短編集『掃除婦のための手引き書』はすばらしいですね。影響を受けたという意味で好きな小説は英国作家バリー・ハインズの『ケス:鷹と少年』(Barry Hines, *A Kestrel for a Knave*) です。もちろん『ライ麦畑でつかまえて』も読みましたが『ケス』とは比較になりません。オーストラリアの作家ではアマンダ・ローリー (Amanda Lohrey)¹²⁾ とアレックス・ミラー (Alex Miller)¹³⁾ ですね。クリストス・チョルカス (Christos Tsiolkas)¹⁴⁾ も好きです。『スラップ』にかんしては他の人たちほどには気に入っていませんが。クリストスは他のどの作家もなしとげていない形で現在のオーストラリア社会に緊張感を生み出しています。彼の小説の中では第1作の *Loaded* が好きですね。今では若者にとっての古典と呼んでいいと思います。

《それでは最後の質問です。もう一度人生があるとしたら何をしたいですか。》

二つあります。まず芸術の領域なら映画監督です。ずっと映画監督に憧れていました。スポーツだったら1万メートルの選手。オリンピックが開催される時にはいつもトラック競技の800メートル走、1500メートル走、それに1万メートル走を見ることにしています。

たしかに映画監督や競技ランナーには憧れますが、その一方で私にとって家族以上に大切な存在はありません。私はずっと大学教員としてフルタイムで働くかわら執筆を続けてきました。私の知っている作家の多くはそうではありませんでしたが。もっと執筆の時間が欲しいのでは、とよく訊かれるのですが、子どもたちを飢えさせたくないから、と答えています。その点では私はとても保守的で、創作よりも確実な仕事と収入を優先しています。

注

1) 本研究は科研費 17K02569 の助成を受けた。

2) 19世紀後半から1970年ごろにかけて、オーストラリアの各州政府の同化政策によって、家族やコミュニティから隔離され、教会や政府の運営する施設に送られた子どもたちやその政策を指して「盗まれた子どもたち (stolen children)」「盗まれた世代 (stolen generation)」と呼ぶ。1997年に公表された *Bringing Them Home Report* によれば、1910年から70年にかけて混血のアボリジナルおよびトレス海峡諸島民の子どもたちのうち10～30%が家族から隔離されたという。

3) ヴァナキュラー (vernacular) とはある土地に固有の言葉、あるいは日常で用いられるインフォーマルな言葉を指す。バーチ氏の場合は作品にオーストラリア人労働者の特徴的な言葉遣いを巧みに取り入れている。

- 4) blackfella. blackfellow の訛り。アボリジナルの人びとを指す俗称で白人も先住民も使用する。
- 5) ハンク・ウィリアムズ (Hank Williams 1923-1953) は米カントリー音楽の伝説的シンガー。
- 6) History Wars。オーストラリアの植民地化の歴史とその過程における先住民の経験をどのように解釈し記述するかを巡り繰り返されてきた論争。主な論争の例として、歴史家ヘンリー・レイノルズ (Henry Reynolds) はヨーロッパ人入植者と先住民が接触するフロンティアにおいて先住民に加えられた暴力を論じた著作を発表してきたが、キース・ウィンドシャトルはレイノルズの著書が「ねつ造した」証拠に基づいていると糾弾した。「歴史戦争」はオーストラリアのナショナルアイデンティティや、歴史研究とフィクションの境界などが問われた「文化戦争」でもあった。
- 7) 歴史研究者。アステカ文明とマヤ文明が専門であるが、ホロコーストや先住民とヨーロッパ人探検家の接触についても執筆している。作家ケイト・グレンヴィル (Kate Grenville) が自身の歴史小説 *The Secret River* (2005) を新しい形式のヒストリオグラフィであると発言したのを受け、歴史とフィクションの役割について論じた “The History Question: Who Owns the Past” を発表、さらなる論争を巻き起こした。
- 8) Cli-Fi (climate fiction の短縮形)。気候変動や地球温暖化を扱ったフィクション作品を指す。
- 9) 民族誌研究者。学際的な研究にも尽力し、環境人文学の分野で中心的役割を担ってきた。
- 10) 民族誌と文化理論を専門とする研究者。前出のデボラ・バード・ローズとともにニューサウスウェールズ大学の環境人文学プログラムを担当。
- 11) アメリカの短編作家。死後に出版された *A Manual for Cleaning Women: Short Stories* (2015) で注目を集める。
- 12) *Camille's Bread* (1995) でマイルズ・フランクリン賞、*Reading Madame Bovary* (2010) でクイーンズランド州首相文学賞受賞。
- 13) *The Ancestor Game* (1992) と *Journey to the Stone Country* (2002) で二度のマイルズ・フランクリン賞を受賞しているオーストラリアを代表する作家の一人。
- 14) ギリシャ系オーストラリア作家。セクシュアリティと人種関係を赤裸々に描き、オーストラリア社会に議論を巻き起こしてきた。*Loaded* (1995) と *Dead Europe* (2005) は映画化されている（前者の映画タイトルは *Head On*）。オーストラリアのサバースに暮らす多様な属性を持つ人たちの人間関係と人種関係を描いた *The Slap* (2008) でコモンウェルス作家賞受賞。同作品はテレビドラマ化され話題を呼んだ。邦訳も出版されている（『スラップ』湊圭史訳、現代企画室、2014年）。

参考文献

トニー・バーチの作品

【長編小説】

Blood. St. Lucia, Queensland: University of Queensland Press, 2011.

Ghost River. St. Lucia, Queensland: University of Queensland Press, 2015.

The White Girl. St. Lucia, Queensland: University of Queensland Press, 2019.

【短編集】

Shadowboxing. Melbourne: Scribe, 2006.

Father's Day. Melbourne: Hunter Publishers, 2009.

The Promise. St. Lucia, Queensland: University of Queensland Press, 2014.

Common People. St. Lucia, Queensland: University of Queensland Press, 2017.

Birch, Tony. “Climate Change, Mining and Traditional Indigenous Knowledge in Australia.” *Social Inclusion*, vol. 4, No. 1, 2016 <<https://www.cogitatiopress.com/socialinclusion/article/view/442>>.

Bringing Them Home: Report of the National Inquiry into the Separation of Aboriginal and Torres Strait Islander Children from Their Families. Australian Human Rights Commission. 1997. <<https://www.humanrights.gov.au/our-work/bringing-them-home-report-1997>>.

Clendinnen, Inga. “The History Question: Who Owns the Past?” *The Quarterly Essay* 23. Melbourne, Black Inc., 2006.

Windschuttle, Ketih. *The Killing of History: How a Discipline is Being Murdered by Literary Critics and Social Theorists*. Sydney: Macleay Press, 1994.

(本学法学部教授)